

晴への願い

——万葉集卷四の形成——

中西進

一序

巻四は歌集そのものの形は簡単である(1)。しかし、それが一時の単純な集成による簡単さではないことは、すでに先学の等しく認めるところである。境田四郎氏は、この巻の藤原朝までの歌は先人によつて大伴家に伝えられ、奈良朝初期の歌は旅人の手許などに書き留められていて、これらを伝えられた家持が、自らの覚書帳から選び出した歌を、自作も当時の人々の歌も、加えて一卷となしろうと想像される(2)。この行文から察するに、境田氏の考えられる、家持伝来以前の歌は、いわばメモのごとき形の資料であつたと思われ、編纂は初めて家持によつてなされたと考えておられるようである。対して、この家持以前にも編纂を考えられるのは澤瀉久孝博士で、人麿・阿倍女郎などは家持の直接の採録ではなく第三期のはじめ頃までのもの(境田氏の「旅人の手許などに

書き留められていた奈良朝初期の歌」であろう)と共に、巻三雑歌と挽歌前半と一緒に、巻一・二の拾遺として一応編纂されており、それに家持が増補して一卷となしたと考えられる(3)。ここに提出された、資料が編纂物かという問題は、その後、論の帰着をきかない。また、さらに重大なことに、ここに両者の認めた「家持以前」とは、具体的にどの歌を指すのか、あるいは家持の「増補」とは、一体どのような作業だったのか。歌群中に混入せしめたのか追加したのか、そうした具体的な過程は、まったく知られていない。境田氏は否定されるのだが、澤瀉博士の肯定される巻三との一体説をとる場合、何故に家持が現形に改めたのか、また右の前提になつている家持の手は、何故に想定し得るか、また旅人という名指しは、何故に生じたのか、疑問は際限もない。

巻四はどのように作られ、どのような位置を与えられるべきなのか。

二 三群の資料

卷四諸歌の題詞書式は、もつとも単純に作者名のみを記すものほか、相聞の巻の当然の結果として、某が某に「贈」る歌（およびそれへの「和歌」という書式をもつ。この両者はほぼ同数となる。ためにこの「贈」を採り上げ、作者名のみものと、その他との三種に分類してみる。その一、作者名のみものは次の如くである（「——作歌」はその他に含めたが「天皇御製」は、天皇の性質上ここに入れる。巻一の処理の場合と等しい）。

A 四八五—四八七 岳本天皇

四九〇・四九一 吹黄刀自

四九六—四九九 柿本朝臣人麿

五〇一—五〇三 柿本朝臣人麿

五〇四 柿本朝臣人麿妻

五〇五 安倍女郎

五〇七 駿河嫁女

五〇八 三方沙弥

五一二 草麿

五一三 志貴皇子

五一四 安倍女郎

五一七 大納言兼大將軍大伴卿

五一八 石川郎女

五一九 大伴女郎 五二〇 後人追同歌

五三二・五三三 大伴宿奈麿宿禰

五三四・五三五 安貴王

五五二 大伴宿禰三依

五六三・五六四 大伴坂上郎女

五六五 賀茂女王

五八五 大伴坂上郎女

六三〇 佐伯宿禰赤麿

六四二 湯原王

六四六 大伴宿禰駿河麿

六四七 大伴坂上郎女

六四八 大伴宿禰駿河麿

六四九 大伴坂上郎女

六五一・六五二 大伴坂上郎女

六五三—六五五 大伴宿禰駿河麿

六五六—六六一 大伴坂上郎女

六六二 市原王

六六三 安都宿禰年足

六六四 大伴宿禰像見

六六五 安倍虫麿

六六六・六六七 大伴坂上郎女

六六八 厚見王

六六九 春日王

六七〇 湯原王 六七二 和歌

左注一連の由を記す。

左注、問答の由を記す。

六七二 安倍虫麿

六七三・六七四 大伴坂上郎女

六八三―六八九 大伴坂上郎女

六九三 大伴宿禰千室

六九四・六九五 広河女王

六九六 石川広成

六九七―六九九 大伴宿禰像見

七〇三・七〇四 巫部麻蘇娘子

七〇九 豊前国娘子大宅女

七一〇 安都屏娘子

七一―七二三 丹波大女娘子

七二二 大伴宿禰家持

右によれば、現万葉集に散在する作家、たとえば柿本人麿は連続して登場し、この中においても散在する作家は、安倍女郎、坂上郎女、湯原王、大伴駿河麿、安倍虫麿の五人となる。内、駿河麿と虫麿とは共に坂上郎女との贈答の故に登場するものであるから、純粹には一回ずつ、安倍女郎と湯原王とが重出するほかは、坂上郎女が頻出するというべきである。

次に、上述した「贈」の歌のグループを掲げよう。

B1 五一一 中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌

五一六 阿倍女郎答歌

五二二―五二四 京職藤原大夫贈大伴郎女歌

五二五―五二八 大伴郎女和歌

五三〇 天皇賜海上女王御歌

五三一 海上女王奉和歌

五三七―五四二 高田女王贈今城王

五五三・五五四 丹生女王贈太宰帥大伴卿歌

五五五 大宰帥大伴卿贈大貳丹比県守卿遷任

民部卿歌

五五六 賀茂女王贈大伴宿禰三依歌

五六六・五六七 大宰大監大伴宿禰百代等贈使歌

五七七 大納言大伴卿新袍贈撰津大夫高安王

歌

2 五七九・五八〇 余明軍与大伴宿禰家持歌

五八一―五八四 大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持

歌

五八六 大伴宿禰稻公贈田村大嬢歌

五八七―六一〇 笠女郎贈大伴宿禰家持歌

六一一・六一二 大伴宿禰家持和歌

六一三―六一七 山口女王贈大伴宿禰家持歌

3 六一八 大神女郎贈大伴宿禰家持歌

西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈

夫君歌

六二二 佐伯宿禰東人和歌

六二七 娘子報贈佐伯宿禰赤麿歌

六二八 佐伯宿禰赤麿和歌

六三一・六三二 湯原王贈娘子歌

六三三―六四一

娘子報贈歌・湯原王亦贈歌・娘子復報贈歌・湯原王亦贈歌・娘子復報贈歌・湯原王亦贈歌・娘子復報贈歌

4 六七五―六七九

中臣女郎贈大伴宿禰家持歌

六九一・六九二

大伴宿禰家持禰娘子歌

七〇一・七〇二

河内百枝娘子贈大伴宿禰家持歌

七〇五

大伴宿禰家持禰童女歌

七〇六

童女來報歌

七〇七・七〇八

栗田女娘子贈大伴宿禰家持歌

七一一―七二〇

大伴宿禰家持贈娘子歌

七二七・七二八

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌

七二九―七三一

大伴坂上大嬢贈大伴宿禰家持歌

七三二―七三五

又大伴宿禰家持和歌・同坂上大嬢贈家持歌・又家持和坂上大嬢歌・同大嬢贈家持・又家持和坂上大嬢・更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌

七五六一―七五九

大伴田村家之大嬢贈妹坂上大嬢歌

七六二・七六三

紀女郎贈大伴宿禰家持

七六四

大伴宿禰家持和歌

七六九

大伴宿禰家持報贈紀女郎

七七五

大伴宿禰家持贈紀女郎

七七六―七八一

紀女郎報贈家持歌・大伴宿禰家持更贈紀女郎

七八三―七八五

大伴宿禰家持贈娘子歌

七八六―七八八

大伴宿禰家持報贈藤原朝臣久須磨歌

七八九―七九二

又家持贈藤原朝臣久須磨歌・藤原朝臣久須磨來報歌

右においてはAよりも一そう類同歌の集中が著しい。たと

えば聖武天皇以下の皇室関係者が集中し、余明軍の歌以下に家持関係歌が並ぶ（介入する稻公の歌は例外的だが、坂上大嬢の關係で入ったものか）。ついで同族佐伯氏の東人と赤磨とが並び、湯原王の贈答歌一群が続く。この後は再び家持關係歌となつて終る（ここでも田村大嬢が例外的に介入する）。これらを便宜1・2:と分つと太宰府關係を含め、皇族歌人を多くもつ家持先代の歌群、家持關係、佐伯両氏と湯原王、再び家持關係の四群と考ふる事が出来る。さらにこの家持關係歌は前群が坂上大嬢・笠女郎・山口女王・大神女郎との贈答で、後群が中臣女郎・娘子・百枝娘子・童女・栗田娘子・娘子と続いて坂上大嬢に至る。この後は坂上大嬢・紀女郎がそれぞれ一団となり、最後に久須磨との贈答がたつた終る。

最後にその他の歌を一括して掲げてみよう。

C

四八四

難波天皇妹奉上山跡皇兄御歌

四八八

額田王思近江天皇作歌

四八九

鏡王女作歌

四九二―四九五

田部忌寸櫛子任太宰府時歌

五〇〇

碁檀越往伊勢国時留妻作歌

五〇九・五一〇

丹比真人笠磨下筑紫国時作歌

五一一 幸伊勢国時当麻麿大夫妻作歌

五二一 藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈

五三六 門部王恋歌

五四三―五四五 神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時為

贈從駕人所詠娘子笠朝臣金村作歌

五四六―五四八 二年乙丑春三月幸三香原離宮之時得

娘子作歌

五四九―五五一 五年戊辰大宰小式石川足人朝臣遷任

錢于筑前國蘆城馭家歌

五五九―五六二 太宰大監大伴百代恋歌

五六八―五七一 太宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時

府官人等錢卿筑前國蘆城馭家歌

五七二・五七三 太宰帥大伴卿上京之後沙彌滿誓贈卿

歌

五七四・五七五 大納言大伴卿和歌

五七六 太宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井連

大成悲嘆作歌

五七八 大伴宿禰三依悲別歌

六一九・六二〇 大伴坂上郎女怨恨歌

六二二 池辺王宴誦歌

六二四 天皇思酒人女王御製歌

六二五 高安王襲鮎贈娘子歌

六二六 八代女王獻天皇歌

六二九 大伴四綱宴席歌

六四三―六四五 紀女郎怨恨歌

六五〇 大伴宿禰三依離復相飲歌

六八〇―六八二 大伴宿禰家持与交遊別歌

六九〇 大伴宿禰三依悲別歌

七〇〇 大伴宿禰家持到娘子之門作歌

七一一 獻天皇歌

七二三・七二四 大伴坂上郎女從跡見庄賜留宅女子大

孃歌

七二五・七二六 獻天皇歌

七六〇・七六一 大伴坂上郎女從竹田庄贈賜女子大孃

歌

七六五 在久邇京思留寧樂宅坂上大孃大伴宿

禰家持作歌

七六六 藤原郎女聞之即和歌

七六七 大伴宿禰家持更贈大孃歌

七七〇―七七四 大伴宿禰家持從久邇京贈坂上大孃歌

七八二 紀女郎妻物贈友歌

これらはまさしく、そのほかであって、すべて統一した性格をもっているというのではない。たとえば金村のものなどこれだけで別種の歌群であろうことは、その作者名が桂本に別行となつて題詞にはないことをもつても、明らかである。また全体としての先のA・Bほどの集中を示さぬ事も、それを物語っている。しかし、ごく大まかな傾向は示しているよう

で、最初の部分、金村歌群に先立つものは、いわば恋物語の歌々である。その意味の一貫した性格は、後続の歌々とは全く異なるもので、それを「所談」れたり、「得娘子」たりする金村の歌は、きわめて滑らかに継承している。その後の部分は太宰府の歌となる。しかも、何れも遷任時の歌で、官人遷任に伴う恋物語こそ先立つ歌群であつた。その次の部分、三依の両悲別歌にはさまる部分は、坂上郎女・家持の時代を迎えながら、彼らを中心としない、もつと広範圍の人々の歌群である。最終を構成するものは坂上郎女・家持で藤原郎女の和歌もある。紀女郎の一首の添加は、理由がわからないが、このように一見散漫でもあり、統一ある歌群でない事は明らかだが、その中の自らなる配列を得るのが、この歌群である。かく三群に分つたものがそれぞれに、自らなる集中、整理を示す。さらにその上に、これら三群のそれぞれを構成する人々は、こうして区分してみると、非常に異つて、各群の特色をなす。

それは、現万葉集においては一団化した表情を並べてはいても、先立つ段階においては別の世界のものであつた事を意味しよう。三群を、万葉集に先立つ別資料と、認める所以である。

三 資料の性格

しからば、これらの資料はどのような伝来、性質をもち、

どのような過程によつて現形を形成するに至つたのか。

資料Aは坂上郎女が六ヶ所に顔を出す。既に触れた如く湯原王も二ヶ所に散在するが、後出の一首は厚見王・春日王と並べられたもので、市原王の作以降、もう一人の重出者像見も含めて、元来同一資料のものではなかつたかと思われる。湯原・春日は共に志貴の子である。湯原への「和歌一首」は作者が不明だが、最初の筆録者の和歌なるが故に、名を記さなかつたのであろう。また資料そのままの形でここに記されたことも知られる。とすれば、この歌群中に唯一散在する作家こそ、この歌群の中心であり、和歌もその者の作ではないか。その者、つまり坂上郎女がA群の資料伝承者だと思われる。郎女は駿河鷹また安倍虫鷹と贈答をなしている。その中の一つが湯原王との和歌ではないか。

この歌群は先代の歌も集めるが、その中に注意される事の第一は、人麿の妻、采女、吹黄刀自といった、後宮女性の歌を集める事で、この傾向はCにはきはめて稀薄である。対してBは海上女王・高田女王といった人々を集め、階層を異にする。後述のごとく、実はBの保有者を家持と考えるが、両者の自らなる相違が、ここにある。第二に人麿を有するのはこのA群であり、BにもCにも人麿は登場しない。ここにおいても家持は人麿と無関係であり、人麿は坂上郎女の、対後宮女性の歌の世界への関心の中に、とり上げられた事が知られる。第三に志貴皇子系の歌を濃厚にもつのが卷四の特色であるが、志貴皇子そのものを有するのはA群である。Bは聖武

と海上女王との贈答、一種類のみの娘子と湯原王の贈答歌をもつ事によって無関係ではないが、Cは作者としては全く関係を断つ。Aはさらにその子湯原・春日、さらにその子安貴、さらにその子市原と、徹底的に志貴系の歌をもつ。おそらくは別に、彼らとの交遊の中に志貴の歌の収められる契機があったのであろう。第四にA群は安麿関係の歌をもつ。坂上郎女にとっては父の周辺であり、対してBは旅人の歌もちCはその旅人の歌すら、和歌の形でしかもたないのと、対照的といふべきであらう。先と同様の、資料保有者の俤が、濃厚である。

また当代の歌については聖武の歌を一首もとどめない事を第一の特色とする。対してBもCもそれを戴せ、のみならずCには坂上郎女自身の天皇献歌を見る。かかる公的性格はCのものであり、Aはもつと私的である。この私的という事は彼女自身の「恋歌」の世界がAだという事であり、それを第二の特色となす。BやC、就中Bに坂上大嬢が多量に登場するのに、Aには一首のそれも、無い。Bに登場しCにない田村大嬢も、Aにはない。つまりAにおける坂上郎女は女としての郎女であつて、母としての姿は見せないのである。母として登場するのはCにおいてである。Bにおける大嬢とて郎女を離れた大嬢で、かろうじて「坂上家之」という形で、郎女が登場するに過ぎない。それでいてこのAにおいて知られる郎女の贈歌の相手は「女孫姑姪之族」たる駿河麿と、「同居姉妹同氣之親」たる両方の親をもつ虫麿とのみであ

る。もし、坂上郎女に真実の恋があり、その相手が未収録のまま失なわれたのだとしたら話は別だが、現万葉集を正直に受取れば、坂上郎女は対象のない恋歌を、数多くなした事になる。駿河麿や虫麿に対する歌を考える時、おそらくこれは事実であつたろうと思われるが、さらにその上に、麻蘇娘子らの歌までも蒐集し加えたものが、彼女の恋の世界であり、そうした「女」の郎女は、唯一Aのみ存する事になる。Bの郎女は「大伴郎女」として語られたものである。A群とは、かかる坂上郎女の志向に支えられて集まつた歌群である。また第三に、この当代歌の最終に一首を添えられた形でしか家持は登場しない。Bには圧倒的に登場する家持、Cには僅か登場する家持と、家持のあり方をめぐつても三群の性格はまるで異なる。一方坂上郎女はBに見えず、Cに三種をしかとどめない事をもつても、三群それぞれの伝承者の頭在は、おおうべくもないであらう。

次にB群の伝承者は大伴家持であらうと思われる。既に前言した如く、太宰府歌以降にあつては稻公の例外があり、佐伯、湯原の介在はあるが、他はことごとく家持関係歌で、先のA群における郎女のごとき人物を有しないからである。むしろ、家持歌と先代歌の結合といった方が正しい程に、家持関係の多い資料である。

この群の特色は、第一に坂上郎女が「大伴郎女」として登場する事である。坂上郎女唯一の、対象のある恋の歌が、ここににある。しかもそれを藤原麿を主とした形で載せる。後の

巻の記載によると、坂上郎女は当代的には「坂上郎女」といわれ、「大伴郎女」とは非大伴一族の呼称と思われる。つまり家持に伝えた人物は、郎女自身では無論なく、もつと遠い大伴以外の人物だったのではないか。その故に聖武や海上・高田・丹生といった諸女王の歌を収め得る事となったと考える。東人の一首も、その内であろう。麿の「京職・大夫」という表現も、よそよそしい言い方である。また、坂上郎女がここに登場するのは、大宰府園歌以前、つまり先代の歌として郎女が登場するわけで、それなりに、BはAよりも年代が新しい歌群という事が出来る。それを傍証するものが余明軍の歌で、旅人薨後、幼い家持に与えられたとすれば、家持にとっては、もはや知り難かった先代の歌々と、現在の自らの周辺の恋愛歌とを蒐集していた事となる。

そのごとくに、このB群が今目的である事を第二の特色とする。第二の坂上大嬢の登場に「離絶数年後会相聞往来」という下注が伴っている。まさしくその通りに第一の大嬢との贈答(家持歌を欠く)の後、数人の女性が登場し、佐伯・湯原が介在した後にも、又数人の女性が現われ、しかる後に再度の大嬢の登場となる。歌日記というのは誤りだが、それに近いように、具に記録されているわけで、この恋の経過を示し得る程に、今日的な歌群がBなのである。

しかし、このB群は、それでは時間的な順序に従ってメモされていった、そのままの形かというところ、そうではない。その根拠は、大嬢の更に贈る「十五首」というところにある。

二度目の大嬢は、一見、次々の贈答を克明に記録しているようだが、贈答各回の歌数に対して、最終の十五首は、著しく均衡を破る。かつこれをもって大嬢関係を終り、田村大嬢の歌を添えて、紀女郎関係に移っている。それぞれでまた一回として戴せられているところによれば、丁度巻十七の平群女郎(三九三—三九四二)のように、正確さを失った大嬢の歌十五首を最後に一括して載せたものと考えざるべきである。正しくは湯原王の贈答のごときであったと見る。

ここに蒐集するものと、されるものとの相違がある。湯原王の歌は、そのままの形で伝えられ、収録されたのであり大嬢の場合は整理されている。整理され得る程に資料が存したのに対して、王のそれは、ここに載せられたそのままが、蒐集者の知り得た資料である。資料保有者側に大嬢のいる事を、第三に注意したい。笠女郎の歌二十四首も、当然ながら一括されている。家持に贈られたそれは家持側に資料として残るのであるから、ここにも家持をB群保有者と考える可能性がある。

最後に、群末には久須磨との贈答を載せる。先に、Aには人麿を載せ安麿を載せるがBにはそれが無い事を言ったが、かわって久須磨にまでおよぶこの歌群の新しさを、注意しなければならぬ。諸兄政権下に、若き家持と久須磨は、後の大伴対藤原といった陰惨な運命を感じさせない。後年の運命を久須磨は知るべくもない。そうした時点における、家持を中心とした恋愛歌の数々が、B群である。Aが坂上郎女を中

心としたのと、大きな相違がある。

最後、C群はどうか。A・Bに比して公的だという事を上に言ったが、その意味は二つある。第一に太宰府に先立つ歌々が難波天皇・額田王・鏡女王以下広い範囲に亘り門部王にいたるまで、広く宮廷中心の恋物語を集めている事、太宰府の歌も作者は石川足人・百代・「官人等」・満誓・葛井大成・三依と、必ずしも大伴一族にかかわらぬ事、次の歌群にも池辺・酒人高安・八代という諸王をもつ事がそれである。Bを最も家持的な、私的歌群とし、その反対がCであり、Aは中間に位置する。第二に、この歌群の「相聞」は必ずしも恋歌に限らない。太宰府のものはことごとくそうであり、物を贈る歌も、また坂上郎女の娘に贈る歌も表現は恋歌的だが、当然恋歌ではない。家持の「与交遊」というのも、普通の恋歌ではない。ここに、この歌群の保有者の、より広い関心がうかがわれ、Bのごとき恋の贈答を「相聞」と認める態度とは、異質なものがある。

次に、恋物語といった事に關して言えば、こうした物語を享受するというのは、卷九相聞の巻頭あたりにも見られる態度で、角度をかえたものが卷十六となる。広く万葉集の、先代歌に対してとる態度である。そしてその関心から金村歌も採用され、官人遷任の点から太宰府歌も入って来る。その態度は後半にも見られ、悲別とか怨恨とかと、内実を描したり、「到娘子之門」とか何処から贈ったとかという事情の説明となったりする。そうした後期歌人の態度を側面から語るもの

が池辺王や四綱の歌で、つまり宴席に恋歌を誦するというあり方、そのあり方の中に、後期歌人の恋歌の享受が知られるのである。

三つ目の事柄として、坂上郎女の様子を考えてみたい。このCにも郎女は二度に亘って登場する。しかしその何れも第三者的に説明された中であって、いわば外側から見た姿を示している。それでいて「献天皇」という歌が二首もあり、かつこれには無記名である事をもってすれば、全くよそよそしい、疎遠な立場から郎女の歌が受けとめられているのでもない事を示す。郎女の歌に先立って、同様八代女王の献歌がある。それには「八代女王献天皇歌」と書かれ、こちらには「坂上郎女献天皇歌」と書かれぬ位置、そこにこそこのC群資料の位置があろう。

これを手がかりとして言えば、このC群の伝承者は大伴三依だったのではないか。金村歌以前のもものは、あるいは金村によって伝えられ、三依のところで金村歌・太宰府歌と一体となり、三依自らの周辺の坂上郎女・家持らの歌と一体となった。だから聖武をめぐる歌は元來郎女の知っていたものであるかもしれない。三依の許に伝えられる事において混合したメモとなり、現形Cが出来たのではないか。

以上の如く考えると、この巻四の三群は、坂上郎女を中心として若干の先代歌をもつ資料群(A)と、家持を中心としてほとんど当代歌のみの資料群(B)と、最後には大伴三依に伝えられたらうと思われる、人物的にもより広く、時代的

にもより長い資料群（C）との三群であった。その三群が集合して現巻四が成立した。

四 現形の成立

三群の集合による現形の成立は、何時か。この巻が先立つ巻と異なる点は、先立つ諸巻が何れも増補・追補という、時間的に二回の撰を経ているのに対して、この巻の資料が併行したものである点である。各資料群には伝承上の時間があるが、それらが途中の段階で成書化されていた形跡はない。何れも私的な歌群として保有されていたと考えられるので、現形への編纂は一回と思われる。ただ三群が同時に集まったか一群ずつ習合していったかは、明確ではない。したがって現形の形成は推測にとどまるが、あり得べき推測として考えられる事は、まず坂上郎女の歌群が家持の歌群と一体となり、それに三依のものが加わったのではないかという事がある。巻八は郎女と家持との歌群から成っているからであり、三依の歌群は郎女・家持の歌群相互ほど近い関係にないからである。そして三依のものがこれらと習合した時期も、やはり家持の大嬢贈歌をもって終っているところによれば、その頃を下限として習合したと考えねばならない。それを家持の手許と考えるのが最も穩当である。わりあい早い時期に、三群は家持の許に集まっていたのではなかったか。

しかし、この巻が難波天皇を巻頭に立てるのは、巻二巻頭

に倣ったものである。巻二に倣うというのは、巻二においては増補という形となって現われる、その意識と等しい。また次いで岳本天皇を置き、額田王の天智を思ふ歌、鏡女王・吹黄刀自の歌を並べるのは何故か。この巻が巻八ときわめて近い事は古来言われているが、その巻八は巻頭に志貴皇子を置く。即ち天智・志貴という系統への尊重をここに考えるのは誤りであろうか。もしそれをもって大過ないものとすれば、この巻の成立にも光仁朝の影を考えざるを得ない。三依は宝龜五年五月の卒、光仁朝まで生存する、教少ない万葉作家の一人である。もし天平二年梅花宴に彼が列したとすれば、事実当時太宰府にあらしいのだが、彼は非常な高齢をもって卒した事になる。直接手を下したのは家持であったとしても、三依も広い意味では編纂と無関係ではなかったはずだ。越中時代に先立つ古い歌群を、宝龜において家持の編纂したものが、巻四ではなかったか。

さて、こうした三群の資料の集合によって巻四が成立したとすれば、その形成過程に含まれる意義は何か。

三群の性格は既に触れたように、非常に異質である。たとえば太宰府歌をもって先代と当代とを区分すればAは先代歌十四種当代歌三十五種、Bは同様九種と二十四種、Cは同様十七種と二十種となる。当代歌を収める事の少ないのはCだが、Aは当代歌もさる事ながら先代歌も少いわけではない。対してBはほとんど坂上郎女以後を集めるところに、当代歌により多くかわる意識がある。

この三群に共通する作者も、多くない。三群共に登場するのは坂上郎女と家持と三依の三人のみで、かつ三依はBに作歌を欠く。A・Bに共通するのは阿倍女郎・賀茂女王・湯原王・佐伯赤麿、B・Cに共通するのは聖武・百代・旅人・紀女郎・坂上大嬢（作歌はBのみ）で、A・Cの共通者はいない。それ程にこの三群はそれぞれ独自の世界をもつと言うべきであるが、それら各群の作者を検するに、大伴氏にかかわる事の最も多いのはAである。安麿・石川郎女・大伴女郎・宿奈麿・駿河麿・像見・千室がそれで、親しい安倍虫麿、同族佐伯赤麿をもつ。Bは旅人・百代・稻公・坂上大嬢・田村大嬢で、血縁の今城王、同族赤麿・東人をもつ。Cは旅人・百代・四綱・坂上大嬢である。三群共通の三人は無論それぞれに登場する。Aから順次大伴色を稀薄にするのだが、Bは圧倒的に家持歌を有し、その意味では一層世界が狭い。したがって当代歌における非大伴氏を考えても、Aはかなり広く人々を有する。皇族が安貴王・賀茂女王・湯原王・市原王・厚見王・春日王・広河女王、他氏の人として安都年足・石川広成・巫部麻蘇娘子以下の三娘子がそれで、Bは山口女王・湯原王、笠女郎・大神女郎・中臣女郎・百枝娘子・粟田女娘子・紀女郎・藤原久須麿がおり、娘子数人が登場する。Cは聖武・高安王・八代女王・池辺王・紀女郎・藤原郎女がいる。つまりAは大伴一族を数多く有しながらも、その圏外にも広く交渉をもつのであり、BがAに比して大伴氏を少くしか有しないというのは、他氏が多いのではなくて、家持周辺に固定

しているという事である。Cの非大伴的色彩は、ここでも確認される。

そうした三群が集合の結果、現形を得た。その現形の印象の中に、右の各歌群の特性は生きつづけているだろうか。現巻四がたとえ広い先代歌をもち、難波天皇から始められていても、この一巻の印象から大伴万葉の影を払い去る事は、困難なのではないか。

上に示した先代・当代の歌の合計は、それぞれ四十種と八十種とであり、現巻四の余明軍の歌あたりをもつて三分の一と二とに分かれるのと、ほぼ符合する。大伴万葉という事は、この前半三分の一の印象が稀薄化し、後半に散在する非大伴歌が弱少化するという事だが、Cの前半がいかに非大伴的であろうと、せいぜい二十首、Aとて安麿以前は二十首、まさしくこれら非大伴歌は、全体として大伴歌に併含された感が強い。Bの歌数は巻四のほぼ半数に当るが、BがA・Cを領有する事によって、現巻四が出来上る結果となったといつてよいだろう。

Cの公性といふ来つたものは、この併含の中に埋没した。この事は、実は大きな意味をもつ。巻九相聞の巻頭部が恋の物語としてCのそれに近い事を既に述べた。巻九は各歌群をつぐ事によって、その生存を保ち得たのであったが、巻四は三群集合という形成の中に、今埋没の運命にあったのである。

という事は、家持は自らの周辺に満ちた恋愛相聞の歌々の

世界とこれらとの間に、異質さを認めなかつた事を意味する。だから彼は難波天皇・岳本天皇の歌によつて巻頭を飾つたのである。たとえば坂上郎女の歌に見られた如き遊戯的往来を、知己の誰彼と交すという事と、遠い宮廷の物語として、みやびの志向の中に主人公を仕立てて享受した歌々(4)とは、歌の担つた機能としても、歌の存した世界としても、まるで異質である。にもかかわらず、彼らを同一世界の中に埋没せしめて一巻をなし、かつ巻頭を飾る事によつて晴がましい一隅の席を得ようとしたのは、はなはだしい錯誤だと、いわざるを得ない。

にもかかわらず、現実には家持がかかる一巻をなしたという事は、一つには家持の歌へのかかわりと、当時の歌のあり様とを物語る。おそらくは先立つて形成を終えていたであろう券一・二、また巻三雑歌・挽歌に伍して、大伴万葉の相聞一巻を立ててみるというのが家持の意志であり、その為には相聞往来の、いわば褻の恋歌とて、先代恋物語の歌と同質に考えられねばならない。家持はそう考えたに違いないが、しかしそれは家持の個人的な意志ではなし得ない。当時の歌がもはやかかる扱ひを受ける程に褻を普通としていたのであり、われわれにとつての錯誤を、錯誤と感ぜしめない程に、歌は褻の相聞だったのである。たとえば家持と大嬢との贈答と同様にしか、人麿の歌も門部王の歌も、扱われなかつたのである。

大伴相聞の一巻を、巻頭を飾り立てて晴がましく作り上げ

たところに、家持を取り巻いていた、彼自身には自覚される事のなかつた、歌の歴史の悲哀があつたと言ふべきであろう。こうして形成された巻四の、結果として示された世界はいかにあるか。右にBによる領有という事を言つたが、Bの特色の一つに、女歌が多いという事がある。相聞たる以上、女性の登場は当然とも言えるが、A・Cが男性を主として歌を収録するのに対して、Bは女性を主とする場合が多い。そのBの性格が巻四を支配するのであれば、巻四は女歌の世界だという事が出来よう。右に述べた形成の意義は、かかる女歌を中核とする一巻の形成であるところにも、確認されるのではないか。

そうした見方の中に、ここに登場する皇族たちを置いてみると、奈良後期における皇孫たちのあり方が、やや明確な形をとつて来る。系統の不明な丹生・八代・山口の諸女王を除いてみると、三群に共通して現われるのは志貴系の人々で、かつAにそれらは多い。また先代歌の中に現われるものは資料保有者と生活を共にするわけではないから除くと、Bには当代歌の中に全く含まない(山口女王は不明)事が知られ、Aは他に広河女王(穗積系)・賀茂女王(高市系)があり、Cには池辺王(大友系)・高安王(長系)がいる。そして何よりも聖武自身が歌を贈り、坂上郎女らの献歌を受けているのであつて、和歌という守旧的な世界、とりわけ褻の相聞の世界に大伴一族とかかわつていた皇孫のあり方がここに示されている。右の中には坂上郎女の閨歴に由来するもの、大伴

と結縁する今城王によるものもあろうが、それらを除いた上に志貴系の人々が浮んで来る事は、彼らが大伴家と近く、和歌の世界にいた事を物語る。いわばその連帯の中に和歌は昔日の栄光を失う事なく、奈良末期に伝えられたのであり、また巻四として歌が相聞の中から回復を試みるのも、この上に可能であったと言つてよい。巻四はそうした事情を教えてくれる巻である。

最後に、巻四は他巻とどのような関連をもつか。

かつて巻二の増補において、宮廷歌の崩れかかったところに大伴氏が登場するといった事があるが(5)、ここに登場する大伴一族および増補部作家は、巻四においては先代歌と言ひ来つた範囲と、まさしく一致する。そしてかつ巻四の人々は、比較してきわめて少数である。またこの共通作家はここに言うAとCとに限られ、中核たるBには一人も登場しない。巻四はそれに代つて、彼らの一世代次の、皇孫が登場するのであつて、同じ相聞ではあつても、より広い古代の歌を増補したのが巻二で、より大伴氏を中心とする当代の歌をもつて形成したのが巻四である。両者の間に、資料の共通はない。逆の表現をすれば、別資料をもつて巻四をなした故にこそ、巻四が家持周辺を中心とする資料を用いざるを得なかつたのである。

巻三との関係も冒頭に述べた如く考えられているが、関連をもつのは譬喩歌のみであつて、あらゆる意味において、巻三の雑歌・挽歌とは異なる。詳述は別稿に譲る。

むしろ作品集として最も近いと思われるのは巻八であろう。作家にも多くの共通を見るが、しかし巻八は巻四に比べて、より広い資料によつてゐる。形成の仕方とも異なる。やはり巻四は巻四としての、独立した性格と位置とを有する故に、一卷として存在するのである。

この独立した性格、先に述べた家持の相聞一卷の形成の試みは、結果的には巻六が雑歌として家持によつて形成されたのと、相対立しながら、近い。しかしそれはあくまでも結果であり、編纂の意図も、形成過程も、両者はまるで異つてゐる(6)。

五 結

万葉集巻四は、坂上郎女・家持・三依の三人による三群の資料を基にしている。彼らに先立つ伝承者は当然あるべきだが、万葉集直前の資料はこれである。この郎女の資料は家持のものと同し、やがて三依のものを習合して一体化したのであるが、最終の編纂は宝龜のころ家持によつてなされたと思われる。

坂上郎女の歌群は先代の歌も持ち、当代のものも、かなり幅広く歌を集めたものであるが、中心は自らの恋歌である。対して家持のものは、先代の歌に乏しく、僅かに湯原王の連をもつのみで、他はほとんどが自らの恋歌である。これは又女歌の世界でもある。三依のものは先代の恋物語の歌を多く

もち、公的な性格をもつところに特色があった。

この三群の集合によって出来た巻四は、家持の歌群が他を支配する事によって、三依の中に伝えられた由来ある歌の世界が消滅し、女歌的、褻の相聞一卷となった。

家持は自らの周辺にみちた恋歌の中に古歌を組み入れ、巻頭を飾る事によって、大伴的相聞の一卷を、晴がましくも形成したのである。たとえいかに巻頭を飾ろうとも、それはもはや巻一や巻二の世界とは互格であり得なかつたのだが、それを敢えてなしたところに、奈良朝末期の歌と家持との悲劇的な出会いがある。

巻六の最終編纂も家持によると思われるが、これは複雑な過程を経ている故か、もつと放任的である。それに対して言えば、巻四が一度の編纂によって、年代的な配慮の中に纏められた事は、より積極的な編者の態度がある。ともかくにも、大伴家万葉の中に、唯一の相聞一卷として仕立てあげられた点をもつてすれば、ここには家持の願いがあつたかもしれない。褻の恋歌をもつて、晴の先代歌を継ごうとした空しい願いが、巻四形成の窮極の意味であるのだろうか。

(41・9・9)

4 拙稿「みやびの源流」(未発表) 参照。

5 拙稿「感愛の誕生―万葉集巻二の形成―」国語国文三五巻四号

6 拙稿「万葉集巻六の形成」国語と国文学四二巻六号参照。

註1 境田四郎氏「巻三・四論」春陽堂万葉集講座六巻四七七頁

2 同右、四七九頁。なお古典大系本の説はこれと同じ。

3 「万葉集の巻々の性質」万葉集大成一卷一五一頁(「万葉歌人の誕生」一〇八頁所収)